

書評

加藤 敏 編著

レジリアンス・文化・創造

野口正行

本書は 2009 年に出版された加藤敏、八木剛平編「レジリアンス：現代精神医学の新しいパラダイム」の第二弾である。前著が精神医学内部におけるレジリアンスの意味を主に扱ったのに比べて、本書ではレジリアンスを人文社会科学の広大な土地に解き放つ。ここでは、文化、災害、移民、語り、戦争トラウマ、芸術、音楽などのさまざまなテーマが取り扱われ、レジリアンスも個人から社会へ、そして生物学的メカニズムから語り、神話、霊的体験にも広がってゆく。著者も精神医学のみならず、哲学、音楽など人文社会科学や芸術を含んだ多彩な顔ぶれとなっている。

もともと精神医学では精神疾患というマイナスに思われていた状態が創造性の発露と関係する、という逆説的な事態に病跡学が光を当てていた。そして本書はそこから一步進める。職業としての芸術家、よく知られている芸術家に創造性の概念をとどめるのではなく、日常生活を生きるすべての人々の日々の営みにも創造性を見ようとする。病むことが、単に「健康になり損ねた敗北」を意味するのではなく、逆境とそれをなんとか乗り越えようとする個人の懸命の努力でもあること、逆境そのものは変えられないとしても、その意味を変えようとする試みでもあること、その試みの成功の度合いと方向性にはさまざまなものがあるにしても、すべて創造的な試みと見なせることを、本書はすくいとろうとする。

このような基本的な姿勢の下で、本書では、「トラウマ」と「文化」、そしてレジリアンスを成り立たせる文化装置としての「語り」「表

現」、なかでも音楽へとその検討を進める。そしてまたレジリアンスの知られざる歴史としてナチス統治下のドイツにも光を当てる。

レジリアンスへの注目は我々の行うべき業務を、「生物学的メカニズムの矯正」から患者の失意と希望、周囲との軋轢と和解に関わることへと広げ、「病態への介入」から、予防・教育・リハビリテーションへ、そしてさらにはスピリチュアルな次元への関わりへと広げる。疾患と治療の理解に関しても、病態の唯一の本質（それさえ直せば万事よくなるという唯一の正解）に標的を定めるものから、より非特異的で一般的な諸々の要因を包み込むものへとふくらんでゆくだろう。

我々は本書において、人文社会科学や芸術との邂逅を経ながら、再び精神医学の現場に戻ってレジリアンスの実践を行うためのヒントを与えられるだろう。本書が、薬理的あるいは精神療法的技法の簡便なマニュアルでないのは事実である。しかし、今我々が置かれている状況を振り返り、レジリアンスとともに我々が「疾患」を含む人間の不幸について、そしてその「治療」あるいは「癒し」について再考するための方向性を指し示してくれるであろう。前著と併せて読むことで、レジリアンスの問題系が孕む可能性と広がりを経験させてくれる著書である。ぜひ一読をお勧めしたい。

(岡山県精神保健福祉センター)

●A5 224 頁 2012 定価 2,940 円(本体 2,800 円+税 5%) 金原出版刊